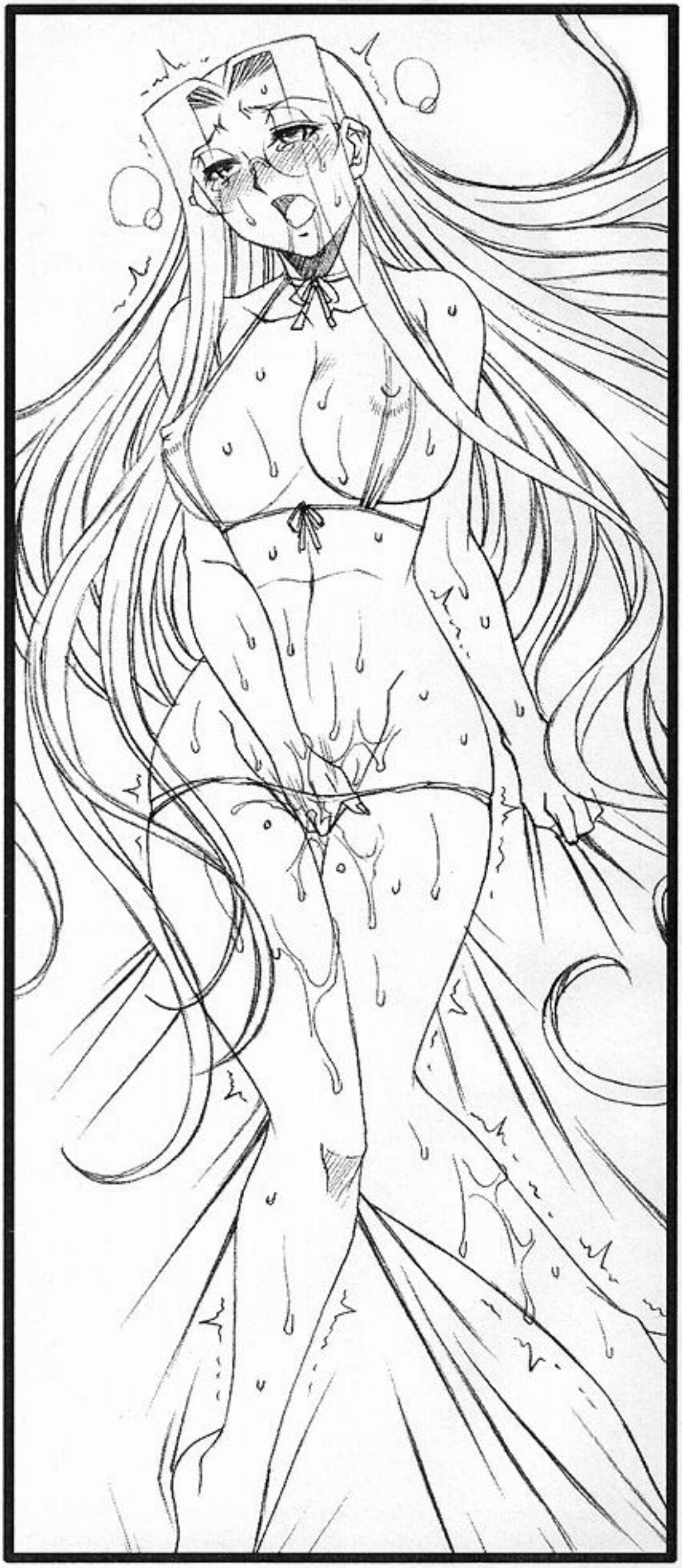
姫騎兵（ライダー）の淫猥なる日々……その後



成年向
FOR ADULT ONLY

前書き

本作は、以前発行した「姫騎兵の淫猥なる日々 +」の
後日談にあたります。

その点をご了承の上、お楽しみいただけると幸いです。

では、あの後、堕ちたライダーさんがどうなったのか、
そのほんの一欠けらを覗いてみることに致しましょう…

とある豪華客船の中、大勢の男達の前で
逃れようも無い痴態をさらしたライダーさん。
何日か過ぎた後、正気に戻ったものの
自分の体が、すでに手遅れである事を悟り、
戸惑いつつも、この状況を受け入れいってしまう…
それ以降、色々な衣装に着替えさせられ船内を
うろつくのが日課となっている。

男達に見つかったその場で、ＳＥＸをさせられる
拒んでも、簡単な愛撫を受けただけで堕とされてしまう。
そんな状態なので、ショーツは常に濡れている状態に。
そして、そのまま下着越しにクンニをされることが多い。

拒みつつも、相手の為すがままにされてしまう
らいだーさん。船内の通路だろうが
トイレだろうが彼女の気持ちなど
お構いなしに男達は、その肉体を玩ぶ。

ライダーさん自身も最初こそは
嫌がっていたが今ではただ抵抗する
「フリ」だけで本気で嫌がっては
いなくなっていた…

事が始まってしまえば、
彼女の心は、一本の肉棒に
よって支配されてしまう。
いかにして味わうか、
より深い快楽を得るために
どう自分は動くべきなのか
それ以外のことは考えないし
考えたくもなかった。

彼女の口から溢れ出る
言葉とは裏腹に、
その肢体は、ただ、
ひたすらに、その甘美の
極みをむしゃぶり尽くし、
さらなる境地を追い求める…

また一歩、こうして
逃れられない淫獄の奈落へと
堕ちていくライダーさんだった…。

次々と交替してライダーさんを犯していく男達、一日で何人相手させられるかは、運次第というより、男達の気分次第だった。
ちなみに、多い時は一日で３０人以上も相手させられている事もある。
少なくとも今までに１０人以下という事はなく、またこれからも無いのだろう…
あっ、はあああっ♡♡はっ…♡…激しいいっ♡
激しすぎるううっ♡だめぇ♡またイクっイカされちゃうっ
ひあああああんんっ♡
そうして、絶え間なく彼女の肉襞と尻穴を犯し続け彼女の悲痛な喘ぎ声が一際高くなっていくすでに何十発ものザーメンを体内に注がれながらも彼女に安らぎは無い…。
そして、…その日付が変わる頃ようやく男達が飽き始めたのか彼女の体を開放していく。…ほんの少しの間だが、彼女は休息を得られるのだった…

次の日、大勢の男達の相手をさせられたライダーさん。シャワーを浴びた後週に一度の定期健診を受ける、相手は長沼エイゾー、彼女をこの淫獄に引きずり込んだ張本人である。
この日だけは他の男達は除外、エイゾーとだけで一日を過ごすのだ…。そして、その身体検査が始まる…、まずは肉壺の中を入念にチェックする。尻穴も、しわを一つ一つ丁寧に数え富め尽くしその感度を確かめる。あまりにもおぞましく、執拗に弄繰り回してくるその手つきに嫌悪を抱きつつ内側から這いよるどうしようもない快楽に身が染まっていくのを感じていくのだった…。

あまりにもしつこい責めでありながら
一度も絶頂を迎えさせてもらえない
ライダーさん。ようやく検査が終わり
ここで抱いてやっても良いという、
エイゾーの言葉に
抗う事すら忘れ、
自ら男の体に跨り
己の秘所を
エイゾーの肉棒に
擦り付ける
始末。
……もはや、
その姿に
プライド
など、
微塵も
感じられ
ない…
おっ♡ おチンポっ
入ってくるっ…♡♡♡
入ってきます
ううっ♡♡
んはああっ♡
びくっ びくっ♡
ブルブル
ブルブル…
ぬぬぬぬ…
ニちゅ
ニちゅ

エイゾーも我慢することなく
すぐさま一発目の膣内射精を
終えるがその程度で萎える
はずもなく、むしろより太く
硬くなっていくのを己の膣で
感じ取るライダーさん。

その刺激を受け、さらに
激しく腰を動かしながら
何度も絶頂を迎えるのだった。

一度挿入が始まれば、
獣のような叫び声をあげ、
「おあずけ」をくらっていた
分を取り返そうとするほど
その腰つきは貪欲に精液を
絞り採ろうしていく。
ただ、ひたすらに快楽を
貪っていくライダーさん。

何発目かの
膣内射精を受け
止めながらも
その精液を
むしゃぶり尽くす
ライダーさん。
まさに一匹の牝
そのものだ…

ど…どうして私っ…
こんな…、はしたないっ
はっ…♡はっ♡
はあああああっ♡
ぶるっ♡
はっ…♡
はっ…♡
はっ…♡
ようやく、男達からも
エイゾーからも解放され
自由の身になれたライダーさん。
その日は久々に誰も訪れない、
安息の日のはずだった…。
しかし、いつの間にか
その手は、指は、
己の秘部を探り始め…
そして、いつの間にか
弄りはじめていた…。
戸惑いながらも、その手は、
肉襞から離れることはなく
さらに深いところへ
潜り込んで行く。
そして一度目の絶頂を迎えた時
安堵と共に訪れたのは、さらなる
絶頂への渇望だった。
ライダーは自分の体が一時たりとも
快楽から放たれる事を望まない…
望むことすらない体に成り果てていた事に
ようやく気付いた…。そして、それは
際限ない悦楽への無間地獄へと
続いていくのだった。
ぱくっ♡
ぱくっ♡
ぱくっ♡
だめっ…イクっ
イってしまう♡
ああっ♡やあっ
イっちゃうううう
はあああ♡

どれほど絶頂を迎えようとも、満たされることは無い
なぜなら、今日はその体に一滴たりとも精液が
注がれることは無いのだから…。
その事に気付いてしまったもののその指は止まらず
むしろ加速していく一方になる事を嫌悪する反面
とても言い表せない快楽に夢中になっていく
ライダーさん。

いつしか、全てを忘れ、ただ一心不乱にその
蕩けきった肉壺をより一層、溶かしつくす
ために激しく己の指で掻き回していく…。

シーツはぐっしょりと濡れ
そぼっているのにその指が
止まろうとすることは無い
おそらく、今夜一晩中
このシーツが乾く事は
ないだろう…。

そしてそのシーツは
びしょびしょに濡れたまま
彼女の体を包むのだろう。

翌朝、彼女がシーツを
取り替える時、それはまた
新たな淫猥なる日々が
始まるに過ぎないのだった…。

H-B